

断章 旭川のアイヌ語地名研究

37

高橋 基

—牛朱別川のアイヌ語名(下)—

旭川を調査した人の牛朱別川のアイヌ語表記の履歴を見ると、文化四年(一八〇七年)の近藤重蔵は「ウシシベツ」、安政四年(一八五七年)の松田市太郎は「ウシ、ベツ」、松浦武四郎も「ウシ、ベツ」、明治二十年の福原鉄之輔は「ウシ、ベツ川」である。これらから、牛朱別川は、ウシシ・ペツ(usis-pet 蹄・川)で、この川のほとりに鹿の足跡が多い川なので、命名されたと理解できる。

ところが、明治二十四年に永田方正が、北海道庁発行の『北海道蝦夷語地名解』で、牛朱別川を「ウシシユ・ペツ」と表記したので、漢字表記では、牛朱別川となったのである。この事情を、アイヌ語地名研究家の山田秀三は、『北海道大百科事典』で、牛朱別川の読み方を「うししゅ

べつがわ」とした上で、「永田方正は、ウシシ・ペツ(usis-pet)の子音(s)シを何故かシユと書き、その影響で地図製作者や役所もその誤りを踏襲した場合が多い。だいたい直して書いたが、牛朱別川ではわざとそれを残した。この誤りの仮名によって牛朱別と当て字されたものらしい」と書いた。

さて、掲載図は、陸地測量部(国土地理院の前身)の明治三十一年製版の北海道仮製五万分一図で、山田秀三が指摘したように、牛朱別川は、「ウシシユ・ペツ」となっている。また、支流の「ポンウシシユ・ペツ」も同じである。これは、牛朱別川のみに限らず、北海道全域のアイヌ語地名表記に『北海道蝦夷語地名解』の表記が採用されたためである。

さて、掲載図の「シニウシユ・ペツ」が、現在の「難波田川」で、その東側に整然と区画されているのが、明治二十五年八月に四〇〇戸が入地した旭川屯田兵村である。同年十一月十八日には、北海道庁告示第六十三

号で、旭川村ウシシユ・ペツ原野一円に、「旭川村字ウシシユ・ペツ」の字が置かれた。このように、川名のみならず地名も永田方正の誤ったアイヌ語表記が踏襲されたのである。

ところで、明治二十年に殖民地調査にあたった福原鉄之輔は、調査復命書で、右の「ウシシユ・ペツ原野」を、「ウシ、ベツ川」の左側、忠別川の北に横たはる樹林をウシ、ベツポロニタイ(usis-pet-poro-nitay ウシ、ベツの大樹林)と称す。其概積

壹千五百四拾六万坪」と記し、特にアイヌの人たちは、「丸木船材は常に之を此地に得ると。」と貴重な記録を残してくれた。

旭川屯田兵村の回顧録では、旭山動物園で有名な旭山は、入地当時は、大樹林があつて見えず、伐木して初めて旭山の存在を知ったというのは有名なエピソードである。また、掲載図のシニウシユ・ペツ(sini-us-pet 休む・いつもする・川)は、この川で休憩するという意味であるが、その理由は明確ではないが、丸木舟の製作時や運搬時に、ひと休みする川だったのであろうか。



明治三十一年、このシニウシユ・ペツの改修工事が、屯田兵第三中隊長の難波田憲欽大尉の命令で敢行され、その結果、氾濫を防ぎ、灌漑の便が開かれたので、これに因んでこの川を「難波田川」と呼ぶようになった。しかし、この川の北海道庁の公式呼称は、「なんばたがわ」となっている。「うしゅべつがわ」と共に、歴史的資料からみて誤りであろう。

アイヌ語地名研究会幹事

※毎月第1週号に掲載します